

慶應義塾大学名誉教授
武蔵野大学名誉教授・客員教授

瀬古美喜先生

Miki Seko

慶應義塾大学経済学部卒業、1978年博士課程修了、1990年博士（経済学）。日本大学、慶應義塾大学、武蔵野大学の教授、マサチューセッツ工科大学経済学部客員研究員、ウプサラ大学（スウェーデン）客員研究員、カリフォルニア大学バークレー校客員研究員などを歴任。野村財団設立の2010年より社会科学助成部会の選考委員を務めている。

瀬古先生

インタビュー

女性の経済学者の先駆者・

学者の道を志して

野村財団の社会科学助成部会の選考委員を務められ、
慶應義塾大学名誉教授、武蔵野大学名誉教授である瀬古美喜先生。

当時、女性では珍しかった学者の道を志すに至った思いや
マサチューセッツ工科大学での留学経験について伺うとともに、
奨学生とOG・OBの皆さんへの応援メッセージをいただきました。



—いつから学者になることを考えていらっしやったのでしょうか？

私は受験して慶應義塾大学の経済学部に入った当初から、「大学院に行つて学者になろう」と決めていました。その頃は、男女雇用機会均等法もまだなく、女子学生の総合職での就職先はほとんどありませんでした。そこで、男女の差がなく実力だけで認めてもらえる社会は学者の道だと考えたわけです。まずは基礎理論を学ぼうと、大学3年時に理論経済学を教えていた福岡正夫先生のゼミを選び、博士課程へと進学しました。

—博士課程終了後は米国に留学されたそうですね？

卒業後の進路は海外の大学へ留学したいと思っていました。ゼミの福岡先生は、ノーベル経済学賞を受賞していたマサチューセッツ工科大学（MIT）のポール・サミュエルソン氏やロバート・ソロー氏と親交があったので、留学するならMITがいいと考えていました。国際文化交流財団の奨学金でのMIT留学を目指しつつ、浮浪人になってしまうのも困るので就職先も探していました。縁あって指導教授に推薦をいただき、日本大学経済学部の助手として就職が決まりました。同じ頃、MITへの留学も決まったため、日大の学部長へ正直に相談しました。「実はMITにも留学が決まり奨学金も受けられるんですが、行くことは無理でしょうね？」と。当時の助手というのは、今のよう

—当時は留学する女性は珍しかったのでは？

そうですね、MITの職員（colleagues）の方にも独身の日本人女性

この道に進むと決めて留学したので、

なりふり構わず勉強しました

だけで来ている女性はいませんでした。同じような境遇の人がいたらまた違った留学生活になっていたと思います。それでも、この道に進むと決めたので、なりふり構わず毎日ついていくのに必死で勉強しましたね。

特に、留学当初は生活面でも語学面でも苦労しました。初めての寮生活に戸惑いながらも、日本人の先輩たちが「お味噌汁を作ったからどうぞ？」などと気に掛けてくれて次第に馴染むことができました。英語は奨学金を受けるために勉強はしていたものの、やはり現地で話すのとは違います。銀行口座を開くときも、銀行員に「あなたは英語がもうちょっとできたらいいね、頑張つてね」と言われたりして（笑）。それが2年ほど経つと、突然雲が晴れたみたいに英語がわかるようになりました。言葉を話せるようになると、アメリカ人は思ったことをパツと言つて心の中に溜めていないことがわかりました。私にはそれが合つていて、私自身もなんでもパツと言うようになりましたね。

—留学を振り返って、今にも活きている学びはありますか？

留学を通じて、視野が広くなり、外から日本を見られるようになりました。日本は世界の中では小さな国であり、良さ・悪さ、強み・弱みがよくわかつて、グローバルな観点で母国を評価できるようになったと思います。MITにはアメリカ人はもちろん、ヨーロッパ系やアジア系、インド系、ラテン系とさまざまな人種がいました。皆さん、経済学者になろうという人ばかりなので目指す方向は同じですが、阿吽の呼吸や口で言わなくてもいい道徳観念は人種によって全く違うのだと。例えば、ノートの貸し借りをしても、お礼を言わない人種もいたり（笑）。そうした違いを知ることができたのも、視野が広がったことの一つです。それから、私はそれまで経済学一辺倒でしたが、食堂や寮などで海洋工学や建築学など、いろんな専門分野の人たちと横のつながりができて、学問の世界も広がりました。

——長く働かれてきた中で、女性であつたがために苦勞したことはありましたか？

私はすごく狭い世界しか知りませんが、女性ですごく苦勞したと思うのは教員という終身雇用のルールに乗るからです。就職活動をしているときには面接で「出産するなら夏休みに産んでね、授業を休講にしたらだめだよ」なんて言われたこともあります。今となればセクハラですが、当時はそんな時代でした。女性用の教員トイレもありませんでした。ただ、一度ルールに乗ってしまえば、女性で珍しいと注目もされました。審議会へ行っても女性は大一人、初めての女性という状況で、非常に特殊な人間に見られていたとは思いますが、気にはなりませんでした。

当時は仕事と家庭のどちらかの選択肢しかないような時代で、私は学者の道に進みたいという思いが強かったので、結婚や家庭を持つことは考えられませんでした。今は夫婦で経済学やそのほかの学問を研究する人が増えて

います。家庭と仕事、どちらかを選ぶ時代ではなくなり、いろいろな可能性が広がってきたと感じています。

——研究を続けていくモチベーションはどのように維持していますか？

私にとって研究は生活の一端です。日本では教授職に定年がありますけれども、研究自体に定年があるわけではないので、好奇心や探究心があれば続けていけると思っています。

研究者にもライフステージがあつて、20代の終身雇用になる前の期限付きのときには、手っ取り早く結果が出そうなテーマにひたすらガリガリ取り組んで、終身雇用になった30〜40代は世界を見て自分がやりたいテーマに取り組めるようになります。そのあとは、リーダーシップを持って人を巻き込んでやっていく。そうして私くらいの年齢になると、全体を統括して若いときには気付けないような批判点を伝えたりする、といったように役割は変わりますが、研究は続いていきます。

研究自体に定年はありません。

好奇心や探究心があれば

続けていけます



また、私はこれまで日本大学、慶應義塾大学、武蔵野大学の経済学部で教えてきて、自慢ではありませんが全ての大学に弟子がいて、中には「私を超える学者になるかな」と思う弟子もいます。自分が研究してきたことをみんなに教えていくことで学問は継承されるので、教えることと研究と一緒にやってきたという感じですが。

——最後に、奨学生とOG・OBの皆さんに応援メッセージをお願いします。

今は世界中でグローバル化が進んでいます。これからはどの国で生活していくにしても、グローバルな観点で将来がどうなるのか、自分自身の意見を持つことがすごく重要です。奨学生の皆さんは、留学という貴重な経験を通してグローバルな視点を身に付け、

世界を見られるようになってほしい。それから、OG・OBで先生となられた方は、ご自身が留学生だった頃はどんなに日本語が上手でもやっぱりネイティブの日本人とは違うところがあつて苦勞されていたと思います。そうした経験を活かして、留学生の皆さんを慮っていただければと思います。

私も武蔵野大学などで働くようになってから留学生に教える機会があり、その中で日本語が上手になってくると、日本の道德観や生活の思考といったものまで理解できるようになるんだなと感じました。ですので、日本語をマスターすることは、日本を理解することに大いに役立つと思います。留学を通じて日本の文化を深く知り、自国への客観的な視点を身に付け、ぜひ日本との懸け橋になってもらいたいですね。